

福岡市方言の問い返し疑問詞疑問文(WH-echo)のピッチパターン

久保, 智之

<https://doi.org/10.15017/2332587>

出版情報 : 文學研究. 87, pp.153-179, 1990-03-31. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

福岡市方言の問い返し疑問詞疑問文 (WH-echo) のピッチパターン

久 保 智 之

[内容]

0. はじめに
1. WH-question のピッチパターン
 - 1-1. 現象の概略
 - 1-2. 規則の定式化
2. echo WH-question のピッチパターン
 - 2-1. 疑問詞が1個の場合
 - 2-1-1. 「カ」を含む場合
 - 2-1-2. 「カ」を含まない場合
 - 2-2. 疑問詞が2個の場合
 - 2-3. 疑問詞が3個の場合
 - 2-4. 問い返しの問い返し
3. まとめ

註

参照・参考文献

0. はじめに

福岡市方言では、ダレ・ナニ等の疑問詞 (WH-word) があると、そこからある一定の範囲まで、だらだらと高く平らなピッチ (声の高さ) が続く。この現象は、早田 (1985, pp. 25-27) で最初に指摘され、筆者は、久保 (1989) で、かなり詳細に記述した。本稿では、前稿で記述しなかった問い返し疑問文のピッチパターン⁽¹⁾を記述する。そして、前稿で扱った現象 (下の A) と合わせて、疑問詞には、それ自体のピッチ、及びそれを含む疑問詞表現が示すピッチのパターンの点から、次の2つがあることを示す (正確な記述は本文に譲る)。

A. 文末の Q [+wh] (疑問詞を受ける形式) や、間接疑問詞疑問文 (indirect

WH-question) のマーカー「カ」等の Q と係り受け関係のある疑問詞
B. 問い返し疑問詞疑問文 (WH-echo) に現われる, 文末 (最後) の Q [+
wh] と係り受け関係のある疑問詞

また, 本稿では, 前稿で定式化した「疑問詞規則」を若干修正している。

さて, ここでいう福岡市方言とは, 福岡県福岡市およびその周辺部で話されている方言であるが, 分析の中心となる言語資料は, 筆者自身の内省による。筆者以外のインフォーマントの言語事実については, 註で触れるにとどめた。⁽²⁾
なお, 筆者が方言を使う環境は, かなり親しい人たちとの間だけに限られているため, 例文も, 男性の使う, かなりくだけたスタイルのものである。

筆者の方言のアクセント体系は, 名詞のパターンは東京方言と同じで, n 音節の名詞には n+1 個の型がある。形容詞と動詞には, アクセントの対立はなく, 音韻規則によって, 後ろから 2 番目のモーラを含む音節にアクセント (◌²) が付与される。タバタ→タバ²タ→タバ²タ, カイタ→カイ²タ→カイ²タ, のように。ピッチ付与の規則は, 東京方言と殆ど同じである。⁽³⁾

以下では, ピッチの高い部分だけを上線で示す。↗は文末の上昇調を示す。前が「高」で終われば「高」からの上昇, 「低」で終われば「低」からの上昇である。例文の分かち書きは, 単に読み易くするために, 音韻句境界などを示しているのではない。意味をとりにくいと思われる例文にだけ, なるべく対応するような「東京方言訳」を, 〈 〉に入れて示した。*印は, その文が非文法的であることを示す。例文には, かなり不自然なものも一部含まれているが, あくまで, 文法規則の検証のためである。

1. WH-question のピッチパターン

問い返し疑問文を見る前に, まず普通の疑問詞疑問文 (WH-question) のピッチパターンについて, 久保 (1989) の記述を, 簡単にまとめてみよう。

1-1. 現象の概略

まず、疑問詞 (WH-word) があると、そこから文末まで平らなピッチで実現する。さらに、疑問詞のない場合は複数あった音韻句が、疑問詞があると、そこから文末まで、1つになってしまう。次の(1)は疑問詞のない場合、(2)はある場合である。

(1) オマエ キョート イッタトヤ↗〈きみ京都行ったのかい?〉

(2) イツ オマエ キョート イッタトヤ↗〈いつきみ京都行ったんだい?〉⁽⁴⁾

「ト」は東京方言の「の」にあたる名詞化辞、「ヤ」は、疑問詞疑問文 (WH-question) にも選択疑問文 (yes/no question) にも現われ得る（無くてもよい）文末助詞である。

次に、間接疑問詞疑問文 (indirect WH-question)⁽⁵⁾ の終わりをマークする「カ」があると、その手前で平らなピッチは終わる。「カ」よりあとの部分は、平叙文や yes/no question のピッチと違わない。

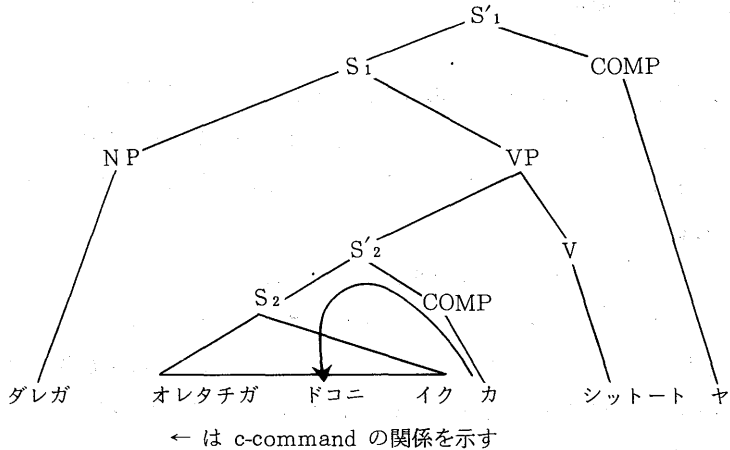
(3) イツ キョート イッタカ オボエトラン〈いつ京都行ったか覚えてない〉⁽⁶⁾

しかし、「カ」があれば常にそこでピッチが下がるかといえば、そうではない。その「カ」も、正しく当該の疑問詞を「受ける」ものでなければならない。

(4) ダレガ オレタチガ ドコニイクカ シットートヤ↗〈誰がぼくたちがどこにいくか知ってるの?〉

この例では、「ダレ」から始まった平らなピッチは、「カ」の直前ではなく、文末まで続いている。これは、「カ」が「受けて」いるのは、「ドコ」であり、「ダレ」ではないからである。この「カ」が「ドコ」を「受ける」というのを、syntactic に、「カ」が「ドコ」を c-command する、と定式化しよう。なお、c-command は以下のように定義する。

c-command : X を支配している最初の枝分かれ節点が Y を支配し、かつ X と Y のあいだに支配関係がないとき、X は Y を c-command する。



【図1】

(4)の c-command の関係は、[図1] のようになる。この場合、「カ」を支配している最初の枝分かれ節点は、 S'_2 であり、 S'_2 は、「ドコ」を支配している。また、「カ」と「ドコ」とのあいだには支配関係はない。よって、「カ」は「ドコ」を c-command していることになる。一方、 S'_2 は「ダレ」を支配してはいないから、「カ」は「ダレ」を c-command していない。

「カ」は「ドコ」を c-command しているから、前に「ダレ」がなければ、「ドコ」から始まった平らなピッチが「カ」の手前まで続くところである。次の例参照。

(5) オレタチガ ドコニ イクカ シットートヤ↗

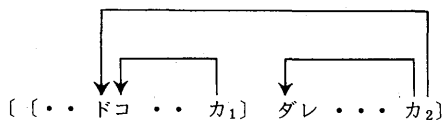
しかし、(4)では「ダレ」が前にあり、しかもこれを c-command する「カ」はないので、「ダレ」から始まった平らなピッチが、文末まで続くことになる。「ドコ…カ」のピッチは関係ない。

次の例も、この c-command で説明できる。

(6) ダレガ オレタチガ ドコニイクカ シットーカ シットーヤ↗

〈誰がぼくたちがどこに行くか知ってるか、知ってる?〉

ここでも、外側にある「ダレ…カ」の平らなピッチが、それより内側に埋め



〔図2〕

込まれた「ドコニイカ」の上に覆い被さっている。

しかし次のような場合、「当該の疑問詞を c-command する」という限定だけでは十分ではない。

(7) オレタチガ ドコニイカ₁ ダレガ シットーカ₂ シットーヤア

c-command の関係は〔図2〕の通り。「カ₂」が c-command しているのは「ドコ」と「ダレ」の両方である。「カ₁」は「ドコ」だけを、「カ₂」は「ダレ」だけを「受けて」いる、ということのを定式化するためには、平らなピッチは、疑問詞から始まって、「当該の疑問詞を c-command する最初の「カ」」の直前まで続く、とせねばならない。

前稿ではさらに、「モ」〈も〉・「デッチャ」〈…でも〉・「タッチャ」〈…ても〉・「カイナ」〈…かな〉も、「カ」と同じふるまいをすることを述べた。

1-2. 規則の定式化

上のようなピッチを実現する規則であるが、平らなピッチが続くこと、さらに、複数の音韻句が1つになることから、下がり目（滝）、つまりアクセント（⁷）と、音韻句境界とを消去する規則が働いていると考えられる。その働く範囲であるが、まず、単独では疑問詞にもアクセントがある（全て語頭アクセント）という意識があるので、消去規則は疑問詞から適用されるといえる。どこまでかということだが、「カ」は、(8)のように、平板の単語についた時、低いピッチで実現する。つまり前アクセントをもっていると考えられる（⁷カ）。そこで消去は一見、「カ」の直前までと言えそうに見える。

- (8) トンカツカ サカナノフライカ ワカラン
 (cf. トンカツガ, サカナノフライガ)

しかし一方、助詞「モ」は、疑問詞表現の後ろに続く場合には、(9)のように必ず「モ」で低くなるが、そうでない場合、(10)のように揺れがある。

- (9) ドノサカナモ ウマイ
 (10) a. サカナモ ウマイ
 b. サカナモ ウマイ

(10)では「モ」固有のアクセントに揺れがあり、(9)では疑問詞表現に関わる規則が働いていると考えられる。

また、(11)のように、「カ」のうしろにさらに助詞が続くときは、「カ」は高くなる。

- (11) ダレガ クルカダケ オシエチャッテン⁽⁸⁾ 〈誰が来るかだけ教えてよ〉

これも、「カ」などの助詞固有のアクセントに帰すべき現象ではなく、疑問詞表現に働く規則の存在を示すものであろう。

また、「カイナ」〈…かな〉は次の(12)のように、平板の名詞に続くとき低いので、前アクセントを持つ(「カイナ」と考えられるのだが、疑問詞表現に続く(13)では、「カイナ」の「カ」まで高い。

- (12) サカナカイナ 〈魚かな?〉
 (13) ドノサカナカイナ 〈どの魚かな?〉

(13)では、疑問詞表現に関わる規則が働いているに違いない。

以上の理由から、アクセント消去規則の適用範囲は、「カ」等を含む音韻句までであり、一旦アクセントと音韻句境界をすべて消去したあと、1つになったその音韻句の、後ろから2番目の音節にアクセントを付与する規則があると考えられる。

最後に、疑問詞が、センテンスを同じくして複数ある場合を考えよう。

- (14) ダレガ ドコニイクカ ワカラン

「ダレ」も「ドコ」も、ともに「カ」によってc-commandされている。しかし、「ダレ」も「ドコ」も、低く始まる。つまり、同一のセンテンス(節)内に疑問

詞が複数あったら、2番目以降の疑問詞の前では、音韻句を切り、新たに音韻句を始めねばならない。

ここまでの観察をまとめて、次のような規則を立てる。⁽⁹⁾

疑問詞規則（左から右に繰り返し適用）

- a. 疑問詞があったら、そこから始めて、文末まで、アクセントと音韻句境界を全て消せ。
- b. 疑問詞があって、さらにその疑問詞を c-command する、「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」がある時には、疑問詞から始めて、それら「カ」等（複数ある場合は最初のもの）を含む音韻句の句末まで（句末の境界は含まない）、アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つになった音韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントを付与せよ。

付則：同一センテンス（節）内に複数の疑問詞がある場合には、各々の疑問詞から、新たに音韻句を始めよ。

a, b 2つの規則は、その適用の環境からわかるように、非該当条件（Elsewhere Condition）により、二者択一的（disjunctive）に適用される。即ち、bが適用され得る環境では、bしか適用されず、aは適用されない。⁽¹⁰⁾

さて、冒頭で触れたように、当方言には、動詞句で終わる音韻句の、後ろから2番目のモーラを含む音節にアクセントを付与する規則がある。この規則と、疑問詞規則bの最後の部分、「結果として1つになった音韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントを付与せよ。」とは、非常によく似ている。実際、この部分を、「…後ろから2番目のモーラを含む音節にアクセントを付与せよ。」としたところで、適用結果は変わらない。しかし、2つの規則を一本化することはできない。非常に一般的な規則が、派生中の異なる段階で働いている、ということだろう。⁽¹¹⁾

2. echo WH-question のピッチパターン

ここでは、疑問詞規則に似た規則が働いていると考えられるのだが、その予

測するところとは違ったピッチパターンを見せる、問い返し疑問詞疑問文 (echo WH-question=WH-echo) について見てみよう。問い返し疑問文とは、南 (1985, p. 69) によれば、次の2つの条件を満足させるものであるという (南は、「問い返し文」と呼ぶ)。

「(i) 問題の表現の直前に、相手のなんらかの発話があること。

(ii) 話し手 (質問者) は、相手の、そのことばを、そのままか、それに近い形でくりかえすことによって、相手にそれを確かめるものであること。」

ここでもこの定義に従っておく。

問い返し疑問文には、(15)Bのように、そう言ったか言わなかったかを相手に問う、問い返し選択疑問文 (echo yes/no question) と、(16)Bのように、相手の発話中の不明部分を問う、問い返し疑問詞疑問文 (echo WH-question) とがある。ここで問題とするのは、後者である。以下の例文で A:、B: 等とあるものは、対話である。

(15) A: キノー キョート イッタッチャン <きのう京都行ったんだ>

B: キノー キョート イッタッテ? <きのう京都行ったって?>

(16) A: キノー キョート イッタッチャン <きのう京都行ったんだ>

B: キノー ドコイッタッテ? <きのうどこ行ったって?>

2-1. 疑問詞が1個の場合

2-1-1. 「カ」を含まない場合

まず、次の minimal pair (17)B と (18)B を見ていただきたい。(17)は、A で自己紹介した後、B で名前の部分を聞き返している。これに対し、(18)は、「あんた誰?」という A の問いに対し、「おまえはいま『あんた誰?』と言ったのか?」と B で聞き返しているのである。

(17) A: オレ クボ <おれ久保>

B: アンタ ダレッテ? <きみ誰だって?>

(18) A: アンタ ダレ ノ ク キミ 誰 (だ)?

B: アンタ ダレ ッテ ノ ク キミ 誰 (だ)? だって?

一見すると、(18)B は、疑問詞規則 a が適用されて、「…ダレッテ ノ」というふう
に、(17)B と同じピッチになるように思われるのだが、(17)B と(18)B のピッチの違
いはどこに由来するのであろうか。(17)B は、「おまえはいま、自分は誰だと言っ
たのか?」という意味で、全体としては WH-question である。一方、(18)B は、
「おまえはいま、『あんた誰?』と言ったのか?」という意味で、全体としては yes
/no question であり、WH-question が直接引用文として埋め込まれている。

そこで、これらを区別して表記するために、まず、疑問文の文末には全て Q
という形式があるものと仮定する。Q には、[wh] という素性について、+か-
かの指定がある。yes/no question では文末に Q[-wh] が、WH-question
では、Q[+wh] があるものとする。平叙文では文末に Q はない。Q としてど
ういう形式が仮定できるかを、[表 1] に示そう。

<u>[+wh] の Q</u>	<u>[-wh] の Q</u>
φ (音形ゼロ)	φ (音形ゼロ)
カ	カドーカ
モ	
デッチャ	
タッチャ	
カイナ	

[表 1]

音形ゼロの「φ」は、yes/no question の文末にも、WH-question の文末にも
現われる。また、「カ」は、東京方言とは違って、間接疑問文のマーカーとして
しか現われない。

Q を仮定したことに伴って、疑問詞規則 a を次のように書き改める。

疑問詞規則 a : 疑問詞があったら、そこから始めて、Q[+wh] まで、アク
セントと音韻句境界を全て消せ。

さて、このQを使って、先の(17)Bと(18)Bを表わせば、

(17)B' アンタ ダレッテφ[+wh]

(18)B' アンタ ダレφ[+wh]ッテφ[-wh]

となろう。よって、疑問詞規則aが予測する通り、(17)Bでは、平らなピッチが文末のQ[+wh]（この場合「φ[+wh]」）まで続くが、(18)Bでは、平らなピッチは文末まではいかず、「ダレ」の直後のQ[+wh]で止まってしまうのである。ここで、「ッテ」は、平板の名詞についた時、「コレッテ↑」〈これだって?〉のように、常に低く実現するので、アクセントをもっている（「ッテ」）。つまり、(18)Bでピッチが下がるのは、「ッテ」固有のアクセントによる。⁽¹²⁾

1節で見た普通の疑問文のいくつかについて、Qに関する違い（(19)–(21)）を示そう。

(19)=(1) オマエ キョート イッタトヤ↑

(20)=(2) イツ オマエ キョート イッタトヤ↑

(21)=(3) イツ キョート イッタカ オボエトラン

(19) オマエ キョート イッタトヤφ[-wh]

(20) イツ オマエ キョート イッタトヤφ[+wh]

(21) イツ キョート イッタカ[+wh] オボエトラン

2-1-2. 「カ」を含む場合

間接選択疑問文 (indirect yes/no question) があって、その一部がわからずに問い返しをした場合、疑問詞1個を含む問い返し疑問文ができる。

(22) A: アシタ クルカドーカ ワカラン 〈あした来るかどうかわかんない〉

B: イツ クルカドーカ ワカランッテ↑ 〈いつ来るかどうかわかんないって?〉

(22)Bの文は次のように表記できる。

(22)B' イツ クルカドーカ[-wh] ワカランッテφ[+wh]

「イツ」から始まって「φ[+wh]」まで、平らなピッチになるのである。しかし、

この「カドーカ」が「カ」であつたら、つまり、Q[+wh] が文末の「 ϕ [+wh]」とのあいだにあつたなら、どうなるのであろうか。以下に、間接疑問詞疑問文 (indirect WH-question) の問い返し疑問詞疑問文 (WH-echo) について見てみよう。つまり、疑問詞は最低2個あることになる。

2-2. 疑問詞が2個ある場合

疑問詞が1個ある間接疑問詞疑問文の Wh-echo を考えてみよう。

(23) A: イマントコ イツ キョートイクカ ワカラン <いまんとこ、いつ京都行くかわかんない>

B: イツ ドコイクカ ワカランッテ? <いつ、どこ行くかわかんないって?>

(23)B を、次の(24)B の問い返し選択疑問文 (yes/no echo) と比べていただきたい。

(24) A: イツ ドコイクカ ワカラン <いつどこ行くかわかんない>

B: イツ ドコイクカ ワカランッテ? <「いつどこ行くかわかんない」だって?>

さて、(23)B と(24)B は、今までの表記法だと、次のようになる。

(23)B' イツ ドコイクカ [+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]

(24)B' イツ ドコイクカ [+wh] ワカランッテ ϕ [-wh]

ここで(23)B' に疑問詞規則 b が適用されると、結果は(24)B と同じになってしまう。つまり、「カ」でピッチが下がる。(23)B のピッチは、いままでの device だけでは記述できない。疑問詞が、疑問詞規則に従わないからである。これは、基底表示の段階で、疑問詞が特別にマークされており、マークされた疑問詞があったら、そこから文末まで平らなピッチで実現させよ、つまり、疑問詞規則 b を適用するな、という規則があると考えられよう。そこで、WH-echo の疑問詞には、基底で [+echo] という指定がしてあると仮定し、次の規約 (convention) を仮定する。

echo WH 規約：

[+echo] と指定された疑問詞には、疑問詞規則 b は適用されない。
また、2-1-1 で書き改めた疑問詞規則 a を、さらに次のように改める。

疑問詞規則 a：疑問詞があったら、そこから始めて、最後の（一番遠くの）

Q [+wh] まで、アクセントと音韻句境界を全て消せ。

これで、(23)B で、「カ [+wh]」を飛び越して文末の「 ϕ [+wh]」まで平らなピッチが続くことが説明できる。「カ」があれば、疑問詞規則 b が働いているかどうか、検証できるわけである。(23)B は、次のように表記できる。

(23)B' イツ ドコ [+echo] イクカ [+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]

ここで、WH-echo の疑問詞ではない(23)B の「イツ」には、疑問詞規則 b が働いていることに注意しておいていただきたい。「イツ」から平らになり、本来なら「カ」で下がるところだが、「カ」の手前にある WH-echo の疑問詞「ドコ」から始まった平らなピッチが、覆い被さっているのである。

さて、疑問詞が 2 つある場合には、各々について、[+echo] の指定があるかないかの 2 通りの可能性があるのだから、 $2 \times 2 = 4$ 通りのパターンが存在する。これを、「カ」をとる間接疑問文を例にして示そう。各々、どういう発話に対する問い返しなのかを、() 内に示した。⁽¹³⁾

(25) ダレガ ドコイクカ ワカランッテ↗

(←ダレガ ドコイクカ ワカラン)

(26) ダレガ ドコイクカ ワカランッテ↗

(←タナカ ドコイクカ ワカラン)

(27) ダレガ ドコイクカ ワカランッテ↗

(←ダレガ キョートイクカ ワカラン)

(28) ダレガ ドコイクカドーカ ワカランッテ↗

(←アイツ キョートイクカドーカ ワカラン)

これらの例の、[+echo] 及び Q の指定は、次のようになっている。

(25) ダレガ ドコイクカ [+wh] ワカランッテ ϕ [-wh]

(26) ダレ [+echo]ガ ドコイクカ [+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]

- (27) ダレガ ドコ[+echo] イクカ[+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]
 (28) ダレ[+echo]ガ ドコ[+echo] イクカドーカ[-wh] ワカランッテ ϕ
 [+wh]

以上のように、最後の例を除いて、3つの文は、ピッチの違いで意味が区別されているのである。

さて、ここで [+echo] という指定や「echo WH 規約」を仮定する以上、2-1で見た、疑問詞1個の問い返し疑問文についても、同様のことを仮定することになる。仮定せずとも説明はできるのだが、疑問詞2個、そして3個以上の場合との整合性を考えねばならない。

2-3. 疑問詞が3個ある場合

疑問詞が3つある疑問文を見てみよう。疑問詞は、各々 [+echo] と指定されているかいないかの2通りだから、3つの疑問詞の指定のしかたは、8通りである。まず、ピッチパターンを示す。

- (29) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (30) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (31) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (32) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (33) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (34) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (35) ダレガ イツ ドコイクカ ワカランッテ↗
 (36) ダレガ イツ ドコイクカドーカ ワカランッテ↗

以下に、各々の例文について、[+echo] と Q に関する指定を示す。

- (29) ダレガ イツ ドコイクカ[+wh] ワカランッテ ϕ [-wh]
 (30) ダレ[+echo]ガ イツ ドコイクカ[+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]
 (31) ダレガ イツ[+echo] ドコイクカ[+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]
 (32) ダレガ イツ ドコ[+echo] イクカ[+wh] ワカランッテ ϕ [+wh]

- (33) ダレ[+echo]ガ イツ[+echo] ドコイクカ[+wh] ワカランッテφ[+wh]
- (34) ダレガ イツ[+echo] ドコ[+echo]イクカ[+wh] ワカランッテφ[+wh]
- (35) ダレ[+echo]ガ イツ ドコ[+echo]イクカ[+wh] ワカランッテφ[+wh]
- (36) ダレ[+echo]ガ イツ[+echo] ドコ[+echo]イクカドーカ[-wh]
ワカランッテφ[+wh]

さて、文頭（第1番目の疑問詞）以外では、[+echo] [+echo] という疑問詞の連続であれば、「イツドコ」というふうに、後ろの疑問詞で一旦ピッチが下がる（「疑問詞規則」の「付則」が扱う現象）が、[+echo] [-echo] という連続では、「イツドコ」と、ピッチが下がらない。[+echo] とマークされた疑問詞の平らなピッチが覆い被さるのである。しかし、文頭（第1番目）の疑問詞に関しては、この対立がなく、必ず低いピッチで始まる。そこで、指定のしかたは8通りあるのだが、実際のピッチのパターンは、それより少ない (31)=(33), (32)=(35), (34)=(36)。

2-4. 問い返しの問い返し

しかし、こういった「問い返し」というのは、理論上は、際限なく繰り返し得るものであろう。

A: なに?

B: おまえはいま「なに?」と言ったのか?

A (Cでもよい): おまえはいま、「おまえはいま『なに?』と言ったのか?」と言ったのか?

.....

というふうに。そこでまず、「カ」のない場合として、2-1-1で見た2つの例文(17)A と(18)A について、

- a. 最初の発話
- b. 問い返し
- c. 問い返しの問い返し

という3つの例文を挙げる。問い返しには、yes/no echoとWH-echoがある。なお、cで現われる「ッテ↗ッテ↗」という表記では、2番目の「ッテ」の始まりのピッチは、最初の「ッテ」の始まりよりも低い。

- (37) a. オレ クボ (affirmative)
 b. アンタ クボッテ↗ (yes/no echo)
 c. アンタ クボッテ↗ッテ↗ (yes/no echo)
- (38) a. オレ クボ (affirmative)
 b. アンタ クボッテ↗ (yes/no echo)
 c. アンタ ダレッテッテ↗ (WH-echo)
- (39) a. オレ クボ (affirmative)
 b. アンタ ダレッテ↗ (WH-echo)
 c. アンタ ダレッテ↗ッテ↗ (yes/no echo)
- (40) a. アンタ ダレ↗ (WH-question)
 b. アンタ ダレッテ↗ (yes/no echo)
 c. アンタ ダレッテ↗ッテ↗ (yes/no echo)

(37)–(40)は、各々次のように表記できる。

- (37) a. オレ クボ
 b. アンタ クボッテ ϕ [–wh]
 c. アンタ クボッテ ϕ [–wh]ッテ ϕ [–wh]
- (38) a. オレ クボ
 b. アンタ クボッテ ϕ [–wh]
 c. アンタ ダレ[+echo]ッテ ϕ [–wh]ッテ ϕ [+wh]
- (39) a. オレ クボ
 b. アンタ ダレ[+echo]ッテ ϕ [+wh]
 c. アンタ ダレ[+echo]ッテ ϕ [+wh]ッテ ϕ [–wh]

- (40) a. アンタ ダレ ϕ [+wh]
 b. アンタ ダレ ϕ [+wh] ッテ ϕ [-wh]
 c. アンタ ダレ ϕ [+wh] ッテ ϕ [-wh] ッテ ϕ [-wh]

以上 12 個の例文のなかで、疑問詞を 1 個含む問い返し疑問文は、2 つある。

アンタ ダレ[+echo] ッテ ϕ [+wh]

アンタ ダレ ϕ [+wh] ッテ ϕ [-wh]

疑問詞を 1 個含む「問い返しの問い返し」疑問文は、以下のように 3 つである。

アンタ ダレ[+echo] ッテ ϕ [-wh] ッテ ϕ [+wh]

アンタ ダレ[+echo] ッテ ϕ [+wh] ッテ ϕ [-wh]

アンタ ダレ ϕ [+wh] ッテ ϕ [-wh] ッテ ϕ [-wh]

これらは全て、2-1 で見た例文と同様、疑問詞に [+echo] とマークしておかないでも説明できるのだが、問い返し疑問文一般を考えれば、やはり、echo WH-word には [+echo] とマークし、「echo WH 規約」が適用されると考えるべきであろう。

次に、「カ」を含む場合として、2-2 の(23)A について、同様のことを見てみよう。

- (41) a. イツ キョートイクカ ワカラン
 b. イツ キョートイクカ ワカラン ッテ↗
 c. イツ ドコイクカ ワカラン ッテ↗

- (42) a. イツ キョートイクカ ワカラン
 b. イツ ドコイクカ ワカラン ッテ↗
 c. イツ ドコイクカ ワカラン ッテ↗ ッテ↗

これらは、各々以下の(41)(42)に対応する。

- (41) a. イツ キョートイクカ [+wh] ワカラン
 b. イツ キョートイクカ [+wh] ワカラン ッテ ϕ [-wh]
 c. イツ ドコ [+echo] イクカ [+wh] ワカラン ッテ ϕ [-wh] ッテ ϕ [+wh]
 (42) a. イツ キョートイクカ [+wh] ワカラン

- b. イツ ドコ [+echo] イクカ [+wh] ワカラ ン ッテ Φ [+wh]
 c. イツ ドコ [+echo] イクカ [+wh] ワカラ ン ッテ Φ [+wh] ッ テ Φ
[-wh]

正しいピッチパターンを得るためには、やはり [+echo] という指定と「echo WH 規約」が不可欠である。

3. まとめ

本稿では、疑問詞表現に、ピッチパターンの点から、次の2つがあることを示した。

A：普通の (unmarked な) 疑問詞表現：疑問詞から最後の Q[+wh] まで、または、疑問詞を c-command する「カ」等の Qがあれば、疑問詞からそれら「カ」等のあたりまで（詳しくは疑問詞規則 bを参照）、平らなピッチで実現する疑問詞表現。次の例参照。

- (43) コノクルマ ヒャクナンジュークマン ヤッタカ ワスレタ
 〈この車、百何十万だったか忘れた〉

B：問い返し疑問文中の疑問詞表現： [+echo] とマークされた疑問詞から、最後の Q[+wh] まで、平らなピッチが続く。次の例参照。

- (44) ドノクルマガ ヒャクナンジューマン ヤッタカ ワスレタッテ ア
 〈どの車が百何十万だったか忘れただっ？〉

これらのピッチの違いを実現するために、最終的には次のような規則と規約 (convention) を仮定した。

疑問詞規則 (左から右に繰り返し適用)

- a：疑問詞があったら、そこから始めて、最後の（一番遠くの）Q[+wh] まで、アクセントと音韻句境界を全て消せ。
 b：疑問詞があって、さらにその疑問詞を c-command する、「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」がある時には、疑問詞から始めて、それら「カ」等（複数ある場合

は最初のもの)を含む音韻句の句末まで(句末の境界は含まない),
アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つになった音
韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントを付与せよ。

付則:同一センテンス(節)内に複数の疑問詞がある場合には、各々の
疑問詞から、新たに音韻句を始めよ。

echo WH 規約:

[+echo]と指定された疑問詞には、疑問詞規則bは適用されない。
これらの規則と規約を仮定すれば、上の2つのピッチパターンは、2つの疑
問詞のもつ、次のような違いの現われと分析できる。

疑問詞A:疑問詞規則a・bのどちらかの適用を受ける。

疑問詞B:[+echo]と指定され、疑問詞規則bの適用を受けない。⁽¹⁴⁾

さて、この福岡市方言のように、ピッチパターンによってWH-questionと
yes/no questionが区別される方言では、問い返し疑問文においても、両者の
相違が如実に現われ、本質的には普通の疑問文と変わらない。⁽¹⁵⁾問い返し疑問文
も、普通の疑問文も、どちらも記述できる枠組みを、ここでは提出したつもり
である。諸賢の御教示を仰ぎたい。

[註]

*インフォーマントの方々、及びコメントを下された方々に感謝します。

- (1) 本稿でいうピッチとは、音響音声学的なものではなく、あくまで話者の意識としてのそれ、つまり、どこが高くどこが低いと意識するか、ということである。
- (2) 筆者は、1957年生まれ、男。22歳まで、福岡市城南区片江(福岡市を博多地区と福岡地区に大きく分ければ、福岡地区)に住み、以後、同早良区(福岡地区)、さらに県内の嘉穂郡、粕屋郡、宗像市と転居した。

以下では、次のインフォーマントの方々について、筆者の省内と違う報告があった場合のみを、註に記すことにする。

坪内佐智世氏(A氏と略):1967年生まれ、女。福岡市東区馬出(大きく言えば博多地区)の生え抜き。

久保謙哉氏(B氏と略):1959年生まれ、男。福岡市城南区片江に19歳まで、

以後東京都豊島区，北区と転居。筆者の弟。

田中雅美氏（C氏と略）：1956年生まれ，男。福岡市中央区梅光園（福岡地区）に29歳まで，以後同早良区に転居。

- (3) 即ち，順序づけられた以下のa・bの規則である。
- a. 音韻句の句頭から句中最初の有アクセント音節まで（なければ句末まで），「高」（有アクセント音節の第2モーラは「低」）とせよ。それ以降は「低」とせよ。
- b. 音韻句の第2モーラが「高」なら，第1モーラは「低」とせよ。
 なお，「アツタ」等，一部語彙的な例外があるほか，疑問詞表現では，モーラ音素が規則的に高く実現する場合がある（註11を参照せよ）。
- (4) 純粹に情報を求める疑問文ではなく，反語や，非難めいた疑問文（いわゆる修辭疑問文）の場合も，本質的には，普通の疑問文と同じに扱うことができる。但し，平らなピッチは，高い平らではなく，低い平らである。
- a. イツ オレガ ソンナコト ユータヤ〈いつ俺がそんなこと言った？→言っていないぞ〉
- b. オマエ ナンショートヤ〈おまえ，何やってんだ？→とんでもないことしやる〉
- c. オマエ イツ ワザワザ オレガ クローンシテ キョートカラ カッテキタ ヤツハシ クッテシモータヤ
 〈おまえ，いつ，わざわざ俺が苦勞して京都から買ってきたハツ橋，食ちまったんだ？→とんでもないやつだ〉
- (5) 本稿では，疑問文を疑問詞疑問文（WH-question）と選択疑問文（yes/no question）に分ける。さらに，これらが文の中に埋め込まれた場合，それぞれ間接疑問詞疑問文（マーカーは「カ」），間接選択疑問文（マーカーは「カドーカ」）と呼ぶことにする。
- (6) 「ダレカキタ」，「ナンカタベタイ」，「ドッカイコーヤ」〈どこか行こうよ〉等の文中の，「ダレカ」，「ナンカ」，「ドッカ」など，いわゆる「不定疑問詞」については，そのピッチ形は，語彙的アクセントが実現したものと考え，疑問詞規則には関係ないものとする。しかし，次の例の「ダレカ」のピッチ形は，当然疑問詞規則によるものとする。
- a. (写真の中の人物を指して) コレ，ダレカ シラン／＼〈これ，誰だか知らない？〉
- (7) C氏は筆者と同じ意識があるが，A氏とB氏は，はっきりしないと言う。一方，博多地区の老年層をインフォーマントとした早田（1985，p.25）では，語頭アクセントになっている。
- (8) 「カ」のあとに助詞がついた場合，音韻句がどこで切れるかによって，以下のよ

うなピッチの違いが出て来る（|| は音韻句境界）。

a. || ダレガ クルカダケ || オシエチャッテン

b. || ダレガ クルカ || ダケ || オシエチャッテン (ダケ)

bで「ダケ」の独立性が弱まれば、次のようなピッチも出て来る。

c. || ダレガ クルカ || ダケ || オシエチャッテン

(9) この規則は、前稿と若干異なっている。前稿では、次のような規則を立てた。

疑問詞規則（左から右に繰り返し適用）

a. 疑問詞があったら、そこから始めて、文末、またはセンテンスを同じくする疑問詞の直前（直前の音韻句境界は含まない）まで、アクセントと音韻句境界を全て消せ。

b. 疑問詞があって、さらにその疑問詞を c-command する、「カ」または「モ」または「デッチャ」または「タッチャ」または「カイナ」、がある時には、疑問詞から始めて、それら「カ」、「モ」等（複数ある場合は最初のもの）を含む音韻句の句末まで（句末の境界は含まない）、アクセントと音韻句境界をすべて消せ。結果として1つになった音韻句の、後ろから2番目の音節に、アクセントを付与せよ。

しかし、この規則では、実は前稿中の次の文の正しいピッチが予測出来ない。

(2) (前稿の番号) ダレガ ドコニ イクカ ワカラン

この文は、上の疑問詞規則の a の適用環境にも b のそれにも該当するので、b しか適用されないことになり、同一センテンス（節）中に複数の疑問詞があるこの文の正しいピッチは出て来ない。これを解決するために、本稿では、上の a の規則から同一センテンス（節）中の複数の疑問詞に関する部分を削除し、付則として付け加えた。

(10) ここでは、以下の Kiparsky (1982, p. 136) の定義に従う。

Rules A, B in the same component apply disjunctively to a form ϕ if and only if

(i) The structural description of A (the special rule) properly includes the structural description of B (the general rule)

(ii) The result of applying A to ϕ is distinct from the result of applying B to ϕ

In that case, A is applied first, and if it takes effect, then B is not applied.

疑問詞規則 a, b は、bの方がspecialであり、その構造記述 (structural description) 「疑問詞があって、さらに…がある時は」は、aの構造記述「疑問詞があったら」を完全に中に含んでいる。また、aとbの適用の結果は異なる（例えば、「カイナ」で終わる文にaが適用されると、文末まで平らなピッチにな

る）。

- (11) 当方言では、モーラ音素 (M) を含む長音節があるとき、たとえば、「 $\overline{\text{CV}M\text{CV}}$ 」と「 $\overline{\text{CV}M\text{CV}}$ 」との対立はなく、一般に、モーラ音素は低く実現する。カイ $\overline{\text{タ}}$ →カイ $\overline{\text{タ}}$ のように、ごく少数「 $\overline{\text{ア}N\text{タ}}$ 」等の例外はあるが、これらは語彙的にマークされていると考えられる。しかし、疑問詞規則が絡む場合、次に示すように、モーラ音素まで高いピッチで実現する場合がごく普通にある。

疑問詞規則 b は、後ろから 2 番目の音節にアクセントを付与する。その 2 番目の音節が、モーラ音素を含む長音節である場合、そのモーラ音素までピッチが高い場合 (下の a・c) と、モーラ音素でピッチが下がる場合 (下の e) がある。

a. ド $\overline{\text{コ}}$ ノ レス $\overline{\text{ト}}$ ラン $\overline{\text{カ}}$ ワカ $\overline{\text{ラ}}$ ン <どこのレストランかわかんない>

* b. ド $\overline{\text{コ}}$ ノ レス $\overline{\text{ト}}$ ラン $\overline{\text{カ}}$ ワカ $\overline{\text{ラ}}$ ン

c. イ $\overline{\text{ク}}$ ラノ カイ $\overline{\text{カ}}$ シッ $\overline{\text{ト}}$ ー $\overline{\text{ア}}$ <いくら貝か知ってる?>

* d. イ $\overline{\text{ク}}$ ラノ カイ $\overline{\text{カ}}$ シッ $\overline{\text{ト}}$ ー $\overline{\text{ア}}$

(cf. レス $\overline{\text{ト}}$ ランガ、カイ $\overline{\text{ガ}}$)

これらの例では、「レストラン $\overline{\text{カ}}$ 」「カイ $\overline{\text{カ}}$ 」のように、モーラ音素と「カ」の間に、単語境界がある。

一方、次のように、「カイ $\overline{\text{ナ}}$ 」で終わる音韻句では、後ろから 2 番目の音節「カイ」にアクセントが付与された場合、モーラ音素「イ」は、a や c と違って、低いピッチで実現する。

e. ド $\overline{\text{コ}}$ ノヒトカイ $\overline{\text{ナ}}$ <どこの人かな?>

* f. ド $\overline{\text{コ}}$ ノヒトカイ $\overline{\text{ナ}}$

この場合、「カイ $\overline{\text{ナ}}$ 」は、単語境界を含んでいないから、「カイ $\overline{\text{タ}}$ 」等と同じく、モーラ音素で下がると考えられる。つまり、少なくとも共時的には、「カイ $\overline{\text{ナ}}$ 」と分析することはできないのである。

これと似た現象は、「アクセントの担い手」に関連して、上野 (1984) や早田 (1989) でも指摘されている。上野 (1984, p. 52) では、東京方言で、

g. イ $\overline{\text{ト}}$ ーシ <伊東市>

h. イ $\overline{\text{ト}}$ ーシ <伊東氏>

の区別があるとしており、モーラがアクセントの担い手であるとする根拠の一つとしている。一方、早田 (1989, p. 40) は、g も h もどちらも「イ $\overline{\text{ト}}$ ーシ」と言うような気がすると述べ、東京方言では、「 $\overline{\text{O}}:\overline{\text{O}}$ 」というピッチパターンが、「平板名詞+前アクセント語」という連続で現われるようだとしている。

- (12) 当方言では、「ン」で終わる形式に引用の補文標識「ッテ」が続いた場合、「ッテ」が「テ」で現われ得るのだが、この現象は、「…ン」と「ッテ」のあいだに、音形ゼロの Q である「 \emptyset 」があるか否かに関わっている (老年層、及び博多地区の若年層 (本稿のインフォーマントの中では A 氏) にあっては、そもそも「ッテ」

を全く使わず、「テ」だけを使うため、この議論は成り立たない。

まず、「レストラン」を例にとり、「ン」と「ッテ」の間に「 ϕ 」がない場合を考えてみよう。a・bでは「 ϕ [-wh]」が、c・dでは「 ϕ [+wh]」が文末にある。

a. $\overline{\text{コノレストランッテ}}$ \nearrow 〈このレストランだって?〉

b. $\overline{\text{コノレストランテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

c. $\overline{\text{ドノレストランッテ}}$ \nearrow 〈どのレストランだって?〉

d. $\overline{\text{ドノレストランテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

では、「 ϕ [-wh]」が、文末以外に、「ッテ」の前にもある場合はどうだろうか。

e. $\overline{\text{コノレストラン}}$ \nearrow $\overline{\text{ッテ}}$ \nearrow 〈「このレストラン?」だって?〉

* f. $\overline{\text{コノレストラン}}$ \nearrow $\overline{\text{テ}}$ \nearrow 〈 " 〉

fが示すように、「…ン」と「ッテ」のあいだに「 ϕ [-wh]」がある場合には、「ッテ」は「テ」にならない。次のように、あいだに「 ϕ [+wh]」がある場合でも同じである。

g. $\overline{\text{ドノレストラン}}$ \nearrow $\overline{\text{ッテ}}$ \nearrow 〈「どのレストラン?」だって?〉

* h. $\overline{\text{ドノレストラン}}$ \nearrow $\overline{\text{テ}}$ \nearrow 〈 " 〉

次に、「ナンボン」〈何本〉を例に、「 ϕ [+wh]」が文末にある例 (i, j) と「ナンボン」と「ッテ」のあいだにある例 (k, l) を見てみよう。

i. $\overline{\text{ナンボンッテ}}$ \nearrow 〈何本だって?〉

j. $\overline{\text{ナンボンテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

k. $\overline{\text{ナンボンッテ}}$ \nearrow 〈「何本?」だって?〉

* l. $\overline{\text{ナンボンテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

この場合も、やはり「…ン」と「ッテ」のあいだに「 ϕ [+wh]」があると、「テ」にはならない。

さて、「ナニ」の場合は、pのように、予想どおり「 $\overline{\text{ナンテ}}$ 」が不可であるほか、mの「 $\overline{\text{ナンッテ}}$ 」も許されないが、後者は、「ナニ (ナン)」の語彙的な特性だと考えられる。

* m. $\overline{\text{ナンッテ}}$ \nearrow 〈何だって?〉

n. $\overline{\text{ナンテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

o. $\overline{\text{ナンッテ}}$ \nearrow 〈「何?」だって?〉

* p. $\overline{\text{ナンテ}}$ \nearrow 〈 " 〉

ちなみに、「テ」しか使わないA氏では、f, h, l, pは全て文法的である。

(13) 以下かなり複雑な文が出て来るが、疑問詞が3個になったり、「問い返し問い返し」になると、かなり不自然であろう。しかし少なくともA氏については、複雑な文に関しても、ピッチについて筆者と同じ直観がある。

(14) 現われる環境にかなり制限があるようだが、疑問詞規則が全く適用されていな

いと考えられる疑問詞表現がある。次の例文中波線の、「ナンジューマン」のよ
うなものである。

- a. A: コレ タカイッチャロー↗〈これ、高いんだろう?〉
 B: ウン。ナンジューマンテスルヨ↗〈うん。何十万ってするよ〉
 A: エー↗ ナンジューマン↗〈えー?! 何十万だって?〉
- b. A: コレ イクラカイナ。ナンジューマンカイナ〈これ、いくらかなあ。何
 十万かなあ〉
 B: ソンナニセンクサ。ゴマンガライヤナイト↗〈そんなにしないさ。5万
 ぐらいじゃない?〉

上の波線部分には、疑問詞規則は働いていない。そこで、こういった疑問詞を仮
 に、free WH-wordと呼んでおこう。これは、次のような、疑問詞規則の適用
 されている「普通の」疑問詞表現とは異なる。

- c. コレ ナンジューマン↗〈これ、何十万? (何十万か知りたい)〉
 d. コレ ナンジューマンカイナ〈これ、何十万かな? (何十万か知りたい)〉
 ここでは、「ナンジューマン」と「ナンジューマン」, 「ナンジューマンカイナ」
 と「ナンジューマンカイナ」が、ピッチの上で対立しているのである。「ナン
 ジューマン」と「ナンジューマン↗」では、上で見たように、意味も違う。後者
 は疑問詞疑問文 (WH-question) であり、答えとして、「50万」とか、「80万」
 とかの具体的な数字を求めているのだが、前者は、疑問文ではない。平叙文であ
 る。「50万」等の具体的な数字は示さず、ただ10万円から90万円の間であるこ
 とを言っているのである(10万円や20万円である可能性は、あまりないかもし
 れない)。「不定表現」とも言えようか。こういう意味の「ナンジューマン」と
 意味的に対立するのは、「ナンマン」や「ナンビャクマン」である。

一般に、「なに」に対する「なにか」, 「だれ」に対する「だれか」等を指して
 「不定表現」とか、「不定代名詞」などと言われる。当方言でも、そういった「疑
 問詞+か」という表現は、同じように使われる(註6参照)。しかし、ここでい
 う「ナンジューマン」等の「不定表現」と、「ナンジューマンカ」等の表現は、
 確かに似た意味を表わしてはいても、次のように、やはり違っているのである。

- e. ナンビャクマンノ オーダイニ ノッタ〈何百万の大台にのった〉
 f. ナンビャクマンカノ オーダイニ ノッタ〈何百万かの大台にのった〉
 eは、十万の桁から百万の桁になったこととほぼ同じ意味だが、fは、それと同
 じことも表わせはするが、例えば4百万代から5百万代になった場合にも使え
 よう。つまり、「ナンビャクマン」は「ナンジューマン」や「ナンゼンマン」と

の対立に注目した表現であり、「ナンビャクマンカ」は、それ以外に、百万代のなかでの対立に注目している場合もある、と言える。

この「ナンジューマン」等には、疑問詞規則は働いていない。疑問詞規則が適用されれば、「ナンジューマン」となるはずである。「ナニ」のアクセントを、ここでは「ナ^ニ」としておくが、どういうアクセントの単語であれ、全て「〇〇」となる。例えば、「ログ^ナ」→「ログジューマン」, 「ナ^ナ」→「ナナジューマン」のように。つまり、疑問詞規則は適用されず、「ナニ」の基底のアクセントは、複合語形成で消去されたものと考えられる。疑問詞疑問文ではないのだから、文末に「Q[+wh]」などなく、疑問詞規則が働かないのは当然のように見える。確かに、以下のgの3つの文は、各々g'のように仮定すれば説明できるであろう。

- g. a. ナンジューマン 〈何十万〉 (free WH-word)
 b. ナンジューマン↗ 〈「何十万」だって?〉
 c. ナンジューマン↗ 〈何十万?〉
 g'. a. ナンジューマン
 b. ナンジューマンφ[-wh]
 c. ナンジューマンφ[+wh]

しかし、free WH-word が、普通の WH-word と共起した場合は、両者とも文末の Q[+wh] によって、疑問詞規則の適用を受けることになってしまう。次の例文 h では、「ダレ」も「ナンビャクマン」も普通の WH-word であり、i では、「ダレ」が WH-word, 「ナンビャクマン」が free WH-word である。

- h. ダレガ ナンビャクマンノ クルマ カッタト↗
 i. ダレガ ナンビャクマンノ クルマ カッタト↗

しかし、これら2つの文は、今までの表記法だと、次のように同じになってしまう。

- j. ダレガ ナンビャクマンノ クルマ カッタトφ[+wh]

hとiを区別するためには、free WH-word の方に、基底で特別なマークを付けておくしかないであろう。仮に、[+free] とマークすることにし、次の規約 (convention) を仮定する。

free WH 規約:

[+free] と指定された疑問詞には、疑問詞規則は適用されない。

しかし、この free WH-word の出現はかなり制限があり、どこまで一般的なものとして記述しているのか、まだよくわからない。

- (15) 日本語諸方言の中で、yes/no question と WH-question を何らかの形式で区別する方言については、福井 (1988) に、自身の母方言である岐阜県萩原町方言に関する記述のほか、いくつかの方言について、簡単な紹介がある。

諸言語の問い返し疑問文に関する研究には、安達 (1989)、南 (1985)、Comrie (1984)、Janda (1985)、McCawley (1987) 等がある。

[参照・参考文献]

- 安達 太郎 (1989) 「日本語の問い返し疑問について」『日本語学』(明治書院) 第 8 巻 第 8 号, pp. 30-40。
- 上野 善道 (1984) 「地方アクセントの研究のために」 加藤正信編『新しい方言研究』(明治書院) 所収, pp. 47-64。
- 久保 智之 (1989) 「福岡市方言の、ダレ・ナニ等の疑問詞を含む文のピッチパターン」『国語学』第 156 集, 左 pp. 1-12。
- 早田 輝洋 (1985) 『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会。
- 早田 輝洋 (1989) 「アクセント」 講座日本語と日本語教育・第 1 巻『日本語学要説』(明治書院) 所収, pp. 28-48。
- 福井 玲 (1988) 「疑問文の体系とその特徴について」『日本方言研究会・第 47 回研究発表会・発表原稿集』, pp. 47-55。
- 南 不二男 (1985) 「質問文の構造」 朝倉日本語新講座 4『文法と意味Ⅱ』(朝倉書店) 所収, pp. 39-74。
- Comrie, Bernard (1984) Interrogativity in Russian. In W. S. Chisholm Jr., ed., *Interrogativity*, pp. 7-46., Amsterdam: John Benjamin.
- Janda, Richard D. (1985) Echo-questions are evidence for what? In William H. Eifort et al., eds., *Papers from the General Session at the 21-st Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society (CLS 21 part 1)*, pp. 171-188. Chicago Linguistic Society, University of Chicago.
- Kiparsky, Paul (1982) From cyclic phonology to lexical phonology. In Harry van der Hulst and Norval Smith, eds., *The structure of phonological representations (Part 1)*, pp. 131-175. Dordrecht: Foris.
- McCawley, James D. (1987) The syntax of English echoes. In Need, B. et al., eds., *CLS 23 part 1*, pp. 246-258.

[付 記]

本稿及び久保 (1989) の中に出て来る、全ての例文を収録したカセットテープを作成した(録音時間約 25 分)。ダビング御希望の方は、カセットテープ (46 分) と、宛名を明記し切手を貼った返信用封筒を同封して、「〒 812 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学文学部言語学研究室 久保智之」宛、お申し込みいただきたい。

The Pitch Patterns of WH-echo Sentences
in the Fukuoka City Dialect of Japanese

Tomoyuki KUBO

In the Fukuoka City dialect of Japanese, unmarked WH-words are subject to the disjunctive "WH-word rules" (a) and (b).

WH-word Rules

- (a) Delete all the accents (ˊ) and the phonological phrase boundaries from WH-word to the last Q[+wh], where Q stands for an interrogative marker.
- (b) If there is an occurrence of one of the five Q[+wh] particles, i.e. *ka*, *mo*, *detcha*, *tatcha*, *kaina*, which c-command the WH-word, then delete all of the accents and the phonological phrase boundaries from the WH-word to the particle, and then reassign an accent to the penultimate syllable of the new phonological phrase.

On the other hand, WH-words in WH-echoes are underlyingly marked as [+echo], and subject to the rule (a) only. Below are examples of an unmarked WH-question (1) and an echo WH-question (2), where the line stands for a high pitch and ↗ for a rising pitch.

- (1) Anta itu Kyooto itta↗
you when Kyoto went
"When did you go to Kyoto?"
- (2) (dialogue)
A : Itu Kyooto itta-ka wasureta.
when Kyoto went-Q forgot
"I forgot when I went to Kyoto"

B : Itu doko itta-ka wasureta-tte↗

when where went-Q forgot-you say ?

“You forgot when you went WHERE ? ”

In (1), *itu* is subject to the rule (a). In (2), both *itu*'s are subject to the rule (b), while *doko* is subject to the rule (a) on account of the specification [+echo], as the following representations show.

(1') Anta itu Kyooto itta ϕ [+wh]

(2)A' Itu Kyooto ittaka[+wh] wasureta

(2)B' Itu doko[+echo] ittaka[+wh] wasuretatte ϕ [+wh]

[校正に際しての付記] 新しいデータを加えた本稿の補編を、『九大言語学研究室報告』第11号(九州大学文学部, 1990年3月)に掲載した。合わせ参照願えれば幸いである。